

せなかむし

編集・古平町史編纂委員会
発行・古平町史編纂室
第二十四号（一日発行）
平成三年九月一日

明治初期・古平場所の

様子と行政の始まり

近 藤 芳 一

長い間続いて来た「場所請負制度」は、新政府樹立と共に明治二年に廃止された。

「古平場所」は比較的和入地に近いということで、相当古くから、「場所請負制」が成立していたのではないかと考えられる。

この場所成立の始まりであるが、北海道（蝦夷地）各地に設定された「商場」でのアイヌとの交易権を、知行主（商場持）が運上金を取って、交易権を商人に譲ったという関係が出来たとき、「請負制度」が成立したとするのが一般的であろう。

「場所請負」の成立については、文献上では、享保から元文期（18世紀前半）とされている。

古平の場合、「場所請負」の開始年代について、現在のところそれを特定することが困難であるので、それは後日とする。

「場所」の始まり

十五世紀ころに成立した松前藩は、米の収穫が無いために、藩士の給与を他藩のように石高で与えることができない条件にあった。そこで、蝦夷地を数十箇所に分割しこれを藩士に与え

た。与えられた藩士を、「場所持」または「支配所持」と称した。

この「場所」が蝦夷地に区画されたのは、いつのころかと言ふことであるが、一般的に慶長年間（1596年以降）とされている。特に、島牧・寿都・岩内・積丹・古平・余市などは和入地に近いということから、相当古くから「場所」として開かれたであろうと考えられる。

場所が成立のころは、「場所持」は自ら自分の場所に行き、蝦夷人と交易をし収入を得ていたが、その後、資金・技術・情報などの面から、商人に交易を請け負わせるのが有利であると

ある朝のこと。「うまい」と評判のそば屋の店先に、地蔵さんが立っていた。それは沢江村の地蔵さんで、「地蔵さんも、そばを食いに来た」と、評判にそなへて供養をした。

いうことから、藩士（場所持）は場所の一切を商人に請け負わせ、その代償として請負人から「運上金」を得た。その商人を「請負人」、蝦夷人との交易の場所が「運上屋」である。

このような制度は、和入地からの遠近により多少の差はあったようであるが、この制度は徐々に進行していったと考えられる。

「請負制度」の開始は、およそ1665年／1720年ころと推定されている。また、「場所」が全部「請負人」の手に渡ったのは、1743年／65年ころといわれている。

—— つづく ——

そば喰い地蔵

法要（願雄寺）

願雄寺を建立の時、地蔵堂と共に境内に移し、毎年、七月二十三日にはそばを供えて供養をするのが行事になっている。

今年のお参りは、田中みささん、田中チヨさん、田中トシさん、八反田和子さんでした。

火事—そして、ふと—

「思い出す級友のこと」

私が一、二年生のころであった。夜、沢江村の唐牛（かろうじ）さんという家が全焼したことがあった。ちょうど我が家の裏窓からはつきり見えたので、よく覚えていた。

その家の男の子は同級生だった。体の小さい、あまり目立たない生徒だった。



その夜は（夕方だったかも知れない）風も無く、真つ赤な炎は真つ直ぐに上がったので、すぐ近くの土場（グラウンドの端）辺りかと緊張した。多分、年配の方なら知っていると思うが、死者も出たようだった。そして火事の後、その一家は消えるともなくどこかへ移って行ってしまった。親たちがどん

んな人だったのか、どんな仕事をしていたのか知らない。ただ男の子は、とてもおとなしい子だった。

そのころの沢江の同級生といえば、相当のモサ（猛者）ばかりだった。授業中に毛ガニを食うやつ、人の弁当を盗み食いするやつ……等々。

なんとなく『同窓会名簿』を開いて見たが、名簿にも彼の名前は載っていないかった。ほんの短い間で、しかも喧嘩

相手にもならなかった彼のこと、火事で焼け出されたという事件をはさんで、今ごろこうして突然に思い出し、ペンを走らせているということが不思議でならない。或いは、彼のことを忘れずにいる同級生もいるだろうと思う。幼いころの、すうっと通り過ぎて行くような、瞬時の夢なのかも知れない。

ほんとにおとなしくて目立たない彼だったが、何か忘れ物でもしたように今もって心の底に残る。

— 終わり —

衆人のかぶっている鳥兜（かぶと）に花が似ているので、この名が付けられたというのが、トリカブトの見かけの青紫色の花の形は、なんとなく兜に似ている。

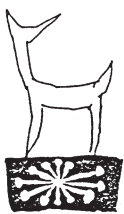
文化会館の広場に高野素十の句碑が建っているが、その素十の句に、『十歩入り憩ひし山のとりかぶと』というのがある。

トリカブトの根のことをアイヌ語で「スルク」と言い、毒という意味にも使われた。毒の神は姉と妹の女神で、「触れるものはね飛ばす」「触れるものからみつく」という意味の名がつけられている。毒の強さは、少量を笹の葉に

※記録によれば、この唐牛さんの火事は、昭和四年五月三十一日、午後八時ごろ発生、二戸全焼し、死者が三人出たが、出火原因は不明、となっている。

塗ったものを舌にのせ、その刺の具合で見分けたりした。また、ある種のクモの口に毒をつけるのと、毒の強い場合にはクモの脚がばらばらに落ちたという。

毒矢で倒れた獲物は、死後、傷口に毒が集まるのでその部分を切り取り、神（スルク・カムイ）にお礼として供える。古平周辺では、大量に採取されたのかも見かけない。水見八郎さんのお話では、昭和の始め樺太（サハリン）の山野には群生していて、青紫色の花が一面に咲いていたという。



随筆

地蔵堂

古平

(五)

古川 義雄



役場に勤めるようになって、戦後の外地からの引揚者の、町への受け入れを担当することになった。

せっかく縁故を頼ってやって来ても、その人がすでにいなくなったり、また、受け入れられない事情があったりして、話もこじれ易く、むずかしい問題があった。毎日が頭を抱えるような忙しさであった。

現・畑沢町長さんのお父さんが見えたのも、ちょうどそんな時であった。

縁故も無かったので、とりあえず泊る所を確保するため、禅源寺にお願いをした。

「地蔵堂でも良かったら」という返事であった。長く住むわけでもないのに、とにかくこ

で我慢してもらうことにした。

ローソクの明かりの中に、ポツンと一人お父さんを残して帰るのが寂しかったが、「いいんですよ」と、逆に私の方が慰められて帰ってきた。

その後も、陸続とやって来る引揚者の住居にと、出戸の沢にある稲倉石鉷山の空長屋を借り

町役場へ一人の老人が訪ねて来て、ボンと一千万円を置いて行かれたという。名も告げずに。「教育関係の費用にでも」と、ひとこと言い残して――。

小さな町の、さわやかな心あたたまる出来事として、大きな話題を呼んだ。そして間もなく、その篤志な方の名が取りざたされるようになった。匿名を望んだ本人の気持ちに沿い、そっと感謝してお

る交渉をしていたが、交渉はなかなか進展しなかった。業を煮やした当時の伊藤助役から、私を指名して、直談判をしてくるように厳命された。

終戦直後のこと、車なんかはもちろん無い。冬道に行く私を途中から猛吹雪が襲い、何度か引き返そうと思った。地蔵堂に押し込められた人たちのことを思い、私は九死に一生を得た思いで、ようやく稲倉石鉷業所に辿り着いた。

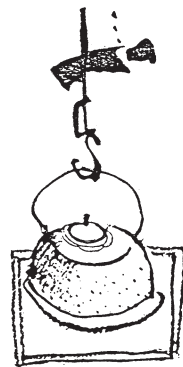
早速、宇須井所長さん（後に古平町教育委員会教育長）と面談した。全身から湯気をあげ、修羅のような私の形相だったら

しい。交渉は、あっさりと妥結した。

廃材で造ったような長屋であったが、畑沢さん一家や、次々と入居者が来て、ともかく賑やかになった。

あの地蔵堂の地蔵さんは、今でも「半眼微笑」しているのだろうか。

―― 終わり ――



く方が良識ではなかったらうか。

望郷の念からだけではなく、生まれ育ったこの町への、ひとつの報恩の区切りだったのではなからうかと思う。

今の世にも、こんな心の洗われるような立派な方が健在なのだ。

ご高齢と聞いておりますが、どうぞお達者で、機会がありましたらまたお出でください。

（匿名希望）

立忌
善善
に
な
町
な
さ
小

羽黒山神社の思い出

池田テール

ここ浜町に、町の人たちから「はごろさん」と呼ばれている小高い丘があって、昔、そこには町を見下ろすようにして神社が建っていました。

その神社は、「羽黒さん」とも「三山神社」とも呼ばれていて、多くの人たち親しまれ、信仰を得ていました。

境内から浜へ向かって急な石段があり、下りた所に宮司さん一家が住んでおり、私の家とは近所なので親しくしております。私は、神社のお祭りが近づくととっても嬉しく、宵宮祭の太鼓の音が響いてくると、母に着物を着替えさせてもらい、手を引かれて境内への石段を上りました。

境内には露店が何軒も並んでいて賑やかなものでした。中には顔見知りのおばさんもいて、提灯の明かりの下で「おやき」を売っており、ごさを敷きランプを吊った「とうきび屋」では、ゆでたてが次々と売られています。

翌日の御神輿渡御も、また盛大でした。

宮司さんの家に、ナオさんという娘さんがいて、年下の私とよく遊んでくれました。私はナオさんが好きでしたので、母にも黙ってうるさくお邪魔をした

ように思います。縄跳びや、コオロギ捕りなどもしました。昔は、この辺りにはコオロギがたくさんいたんです。

私が一年生の時、宮司さん一家はにわかには遠くへ引越して行かれました。ナオさんが私の家に来て、私にと、小箱を母に渡して悲しそうにして去って行ったとか――。

ナオさんに会いたいという気持ちは、今でも心から離れさせ

その後、羽黒山神社のご神体は恵比須神社に合祀されました

【△7日はこんな日】

町内で《腸チブス》発生

伝染病が猛威をふるう

[昭和4年]

港町で、九月十七日、高熱の一人の患者が「腸チブス」と診断され、それから十一月六日まで連続し、二十四人の患者が出た。町ではこの間に臨時町議会を開き、防疫対策について協

議をし、相当な予算をもって極力、治療や予防に努力した。

幸い七日以後の発生は無く、町民を大きな不安に陥れた腸チブスもようやく治まった。

しかし、腸チブス患者二十四

が、境内はいつしかすっかり藪に変わってしまった。

そして幾十年を経た現在、あの「はごろさん」の丘には、古平高校の近代的な校舎が新築され、当時の面影はもう全くありません。校舎前から道路の辺りが境内で、今と同じように、やはり墓地へ行く近道がありました。

盆の夕暮れ時、道すがら聞こえてくるコオロギの声に、今は遠い幼い日のことが目のあたり

―― 終わり ――

人中五人が死亡し、ほかにジフテリアで一人が死亡している。

原因は、海岸に近い井戸に汚水が流れ込んだためと見られ、以後、この井戸は使われなくなった。

また、四百円を支出して隔離病舎を増築し、治療のほか予防にも努めたが、翌年、また腸チブス八人（死亡一）、ジフテリア十一人（死亡者なし）の罹患